

ミシェル・フーコーの「生存の美学」はどのような美学か

—— ニーチェの美学思想との比較から

仲宗根 大介 (無所属)

本発表は、ミシェル・フーコー(1926-1984)が論じた「生存の美学」がどのような美学であったかについて、フリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)の「応用生理学としての美学」という思想を参照しつつ説明を試みるものである。

フーコーの「生存の美学」というテーマは、1976年の『性の歴史 I』の公刊から1984年の『性の歴史 II』と『性の歴史 III』の公刊までの「沈黙期間」にあたる1983年に、「進行中の仕事」として唐突と思える仕方で語られたものである。そこでは主に古代ヨーロッパにおける生活様式の律し方の調査が養生術や家庭管理法や恋愛論などの領域においてなされる。こうした生活術による「生」を「真なる」ものへと練磨する実践が古代世界においていかになされてきたか、これがフーコーの「生存の美学」というテーマの内実をなす。「真の生」の探究としての「生存の美学」と「真理」の探究としての「真理への配慮」の対抗関係が歴史を通じて「西洋文化において本質的で中心的な何か」をなすとも言われる。

ところで、こうした生活術が「美学」の問題となることはまったく自明ではないだろう。ピエール・アドはフーコーの古代研究を「美学」という題を端緒にして批判しており、アドの批判からフーコーを擁護しているジョルジョ・アガンベンにしてもフーコーの古代研究は「美学」というより「倫理」に関わるとすることから反論を始めている。では、「美学」という措辞には固有の意味はなかったのだろうか。上述の講義では「生存の美学」の現代版として「近代芸術」が挙げられている以上、生活術と芸術が何らかの連続性をもつような「美学」をフーコーは構想していたのではないかと考えることは許されよう。そうだとすれば、それはどのような「美学」だろうか。本発表はこの問題をめぐる試みである。

しかしこの試みには困難が伴う。「生存の美学」はフーコー最晩年の仕事であり、その成果は断片的で、何らかの基本発想が貫かれているかさえ判然としないのである。そこで本発表はフーコーが絶えず再訪していたニーチェを参照したい。後期ニーチェの「応用生理学としての美学」という思想においては、生理的な身体とのある独特な関係において「芸術」が論じられ、これとは別様に生理的身体と関わる「道徳」との対抗関係に置かれる。ニーチェのこうした思想を参照することで、フーコーの「生存の美学」の基本的な論点——どのように生活術と芸術を連続的に捉えるか、どのように「真の生」の探究と「真理」の探究を対抗関係に置くか——に見通しを与えること、これが本発表の具体的な作業となる。最終的に本発表は、〈身体活動が感性的な水準で身体へとフィードバックされて身体のあり方を絶えず更新する〉という事態に関わるものとして生活術と芸術を連続的に扱う美学、それがフーコーの「生存の美学」であると主張することになる。